

日英語における強調表現

轟 里 香

On Emphatic Expressions in Japanese and English —Cleft Sentences in News Programs—

Rika Todoroki

Received November 4, 2009

This article is a study of cleft sentences as emphatic expressions used in the visual media, especially in TV news programs. Both Japanese and English have the cleft construction. However, while it is often used in the language in Japanese TV news programs these days, it seems that very few cleft sentences appear in English ones. This is because there is a standard for news programs which requires that they avoid expressions used in entertainment programs. Emphatic expressions like cleft sentences are considered to be used in entertainment programs. On the other hand, in Japan, a lot of TV news programs have been changed to be similar to entertainment programs in recent years. This is the reason the number of emphatic expressions like cleft sentences has been increasing in Japanese news programs.

1. 導 入

本論文では、日本語と英語における強調的な表現である分裂文を取り上げ、ニュース番組への分裂文の出現について考察する。

近年、日本語のニュース番組には幾つかの現象が顕著に見られる。その一つとして、分裂文の出現が挙げられる。

轟 (2007, 2008) はすでに、近年の日本語のニュース番組に顕著に見られる現象として、体言止めあるいは助詞の省略¹ (以降、「体言止め・助詞の省略」と表記する)、動詞的要素の省略などを指摘した。これらの現象は、従来日本語という言語の本質的な特徴とされていた部分に関わるものである。したがって、同じ現象の出現頻度の変化に関して日本語のニュース番組を英語のニュース番組と比較することは困難である。

これに対し、分裂文は、英語と日本語にほぼ対応する構文が存在する。よって、その出現に関しては、比較的容易に日本語のニュース番組と英語のニュース番組との比較を行うことが出来る。

本論文では、ニュース番組に出現する分裂文を見ることにより、日本語のニュース番組に特徴的な現象を指摘する。そして、その現象の背後にある要因を考える。²

2. 分裂文

分裂文 (cleft sentence) とは、学校文法等で強調構文と呼ばれる構文である。次の (1a,b) が英語の分裂文³, (1c) が日本語の分裂文である。

- (1) a. It was perfume that Mary bought in France.
 b. What Mary bought in France was perfume.
 c. 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。

(高見 1999:146)

高見 (1999) によれば、これらの文では、焦点要素が下線部の位置に置かれる。焦点とは、話し手が最も伝達したい部分で、通例文強勢 (アクセント) が置かれる⁴。分裂文とは焦点が文のどの要素であるかを示すことができる構文であると高見は述べている。つまり、分裂文を用いる話し手は、文のいずれかの要素を強調する目的でこの構文を使うということになる。この構文が一般的に「強調構文」と呼ばれていることも、それを示している。

3. ニュース番組における分裂文の出現

近年、日本語のニュース番組では、分裂文がしばしば出現する。以下に例を挙げる。

- (2) 4081チームの頂点に立ったのは、佐賀北高校でした。
 (「おはよう日本」NHK, 2007年8月23日放送)
- (3) 優勝したのは、佐賀北高校でした。
 (「イブニング5」TBS, 2007年8月23日放送)
- (4) a. 喜びに沸いたのは、鳩山総理大臣の地元北海道室蘭市です。
 b. 3時前、小雨の中、真っ暗な国会正門前に姿を現したのは、初当選した民主党の三宅雪子衆議院議員です。
 c. 続いて現れたのは、同じく初当選の民主党の玉木雄一郎衆議院議員。
 (「ニュースウォッチ9」NHK, 2009年9月16日放送)
- (5) 第31回オリンピックの開催地に決まったのは、リオデジャネイロでした。
 (「おはよう日本」NHK, 2009年10月3日放送)

(4) の例のように、一つのトピックを扱ったニュースの中で、分裂文が複数回用いられる場合もある。

分裂文が多用されている例として、あるニュースを詳しく見てみよう。このニュースは、全体の長さが3分3秒間であり、内容は、行方不明のグライダーが発見され、乗員が無事救助されたというものである。その中に、次の(6a-d)のような分裂文が出現している。(6a-d)はすべて、アナウンサーの発話の中に出現したものである。

- (6) a. 救助の決め手となったのは、遭難信号でした。
 b. 狩野さんが乗った一人乗りのグライダーが美瑛町の滑空場を離陸したのは、昨日午後2時半ごろでした。
 c. 事態が動いたのは、今日午前11時前でした。
 d. グライダーが見つかったのは、背の低い笹や木が生えた場所でした。

(「ニュース7」NHK, 2009年10月13日放送)

これらの表現が出現したコンテキストを見るために、このニュースを映像の転換ごとに区切って、映像、音声、発話者を表1に示す。分裂文を使った表現には表中で下線を付しておく。発話者がニュースの報告者以外の部分の音声は省略する⁵。

このニュースのコンテキストを見ると、分裂文以外に、轟(2007, 2008)が指摘した体言止めや疑問形の文も使われている。これらを取り出して(7)(8)として以下に示す。

- (7) a. 広大な範囲で行われた搜索。
 b. 昨日午後3時40分ごろの無線連絡を最後に行方が分からなくなっていたグライダー。
 c. 広大な大雪山系で続けられた搜索。
 d. その後、自衛隊のヘリコプターも同じ内容を受信。
 (8) a. 衝撃を和らげたのか。
 b. 救助されるまでの20時間あまり、狩野さんはどうやって寒さをしのいだのか。

接続詞の後に、普通より長い間が置かれている(9)のような部分もある。

- (9) 日没までに戻る予定でした。しかし・・・(約2秒の間)。午後3時40分ごろに無線で位置を伝えてきたのを最後に、連絡が取れなくなりました。

これらの分裂文、体言止め、疑問形の文、普通より長い間といった手法は、全体としてこのニュースをドラマチックに演出するために用いられているように思われる。

このような日本語のニュースに対し、英語のニュース番組では、分裂文を見つけることは難しい。次の例は、擬似分裂文であるが、VTRのインタビューの中に出現しているものであり、ニュース原稿を読むアナウンサーの発話の中に出現することとはまったく意味が異なる。

- (10) There will be enough vaccine. What we're concerned about is getting it to the priority populations as quickly as possible.

(CBS MORNING NEWS, September 16, 2009, CBS News Transcripts, 下線は筆者)

表 1

映 像	音 声	発話者
アナウンサー	「では、次のニュースです。北海道で昨日午後から行方が分からなくなっていたグライダーが、十勝岳の山林で見つかりました。搭乗していた男性は救助され、意識ははっきりしているということです。広大な範囲で行われた搜索。 <u>救助の決め手となったのは、遭難信号でした。</u> 」	アナウンサー
ヘリコプターから撮影した映像	「昨日午後3時40分ごろの無線連絡を最後に行方が分からなくなっていたグライダー。今日正午過ぎに発見の情報が入りました。」	アナウンサー
県警担当者の会見	(略)	(略)
男性が救助される映像	自衛隊が撮影した映像です。グライダーに乗っていた札幌市厚別区の会社員、狩野雅さんは、午後1時前、北海道十勝岳の山林で救助されました。	アナウンサー
グライダーの移動を示す図と矢印	狩野さんが乗った一人乗りのグライダーが美瑛町の滑空場を離陸したのは、昨日午後2時半ごろでした。日没までに戻る予定でした。しかし・・・(約2秒の間)。午後3時40分ごろに無線で位置を伝えてきたのを最後に、連絡が取れなくなりました。広大な大雪山系で続けられた搜索。 <u>事態が動いたのは、今日午前11時前でした。</u>	アナウンサー
ヘリコプターから撮影した映像	狩野さんは、グライダーの無線機をはずして下山しながら遭難信号を出していました。	アナウンサー
日航機の映像	この情報を、当時現场上空を飛んでいたこの日航機が捉えました。緊急事態を知らせる「メーデー」という言葉と、自らの機体番号を知らせる内容でした。その後、自衛隊のヘリコプターも同じ内容を受信。	アナウンサー
ヘリコプターから撮影した映像	そして正午過ぎ、狩野さんとグライダーを見つけました。	アナウンサー
ヘリコプターから撮影した映像	コックピットには大きな損傷はないようです。機体の周りは緑色の笹で覆われています。	記者
ヘリコプターから撮影した映像	<u>グライダーが見つかったのは、背の低い笹や木が生えた場所でした。</u> 衝撃を和らげたのか。狩野さんは検査のため病院に入院していますが、意識ははっきりしているということです。	アナウンサー
救助に当たった自衛隊員	(略)	(略)
ヘリコプターから撮影した映像	狩野さんが救助された場所は、標高がおよそ1,000mです。夜になると、気温が氷点下にまで下がります。救助されるまでの20時間あまり、狩野さんはどうやって寒さをしのいだのか。警察は、明日あらためて狩野さんから事情を聴いて、事故当時の詳しい状況を調べることにしています。	アナウンサー

このように、分裂文の出現に関し日本語と英語のニュース番組で相違があるのには、何らかの原因があるのは明らかである。次節では、その点を取り上げる。

4. ニュース番組で分裂文が出現する背景

轟 (2007, 2008) が述べるように、近年、日本語のニュース番組は娯楽的な要素を盛り込むようになってきている。これは、事実をできるだけ客観的に伝えるというより、脚色して伝えるという、報道の姿勢における変化の現われであると考えられる。加来 (2007) は次のように述べている。「ワイドショーが硬派な政治問題や国際情勢なども扱うようになり、脱芸能化も果たした。逆に、ニュース番組には娯楽要素が盛り込まれ、両者の境界はどんどんあいまいになってきている。」同様の点はすでに1990年代に指摘されていた。小泉 (1998) は、ニュースと娯楽の垣根がなくなりつつあるのが現状であると述べている。現在ではこの傾向が定着してしまっている観がある。

ニュース番組が娯楽的な要素を盛り込むようになってきていることにより、様々な娯楽番組的手法がニュース番組で使われるようになった。たとえば、ニュース番組の出演者同士が顔を見合わせてニュース内容の感想を述べ合うことが挙げられる。村松 (2005) の分析によれば、日本のニュース番組では、キャスター同士の会話のほとんどすべてが、放送されたニュース・話題に関連していた。村松はこれを、アメリカのニュース番組とは大きく異なる点であると指摘し、CNNなどでは、前後のニュースと無関係にプライベートな会話をする」と述べている。

映像面では、写真を徐々にアップしていくなど、特殊な効果を出すことを狙った、ドラマや映画的な手法がニュース番組でも頻繁に取り入れられている。音声面では、小泉 (1998) は、「(世界各地のニュースと比べると) 日本のニュースは音楽や音楽効果の使用頻度が飛び抜けて高いように思える」と述べている。

このような、ニュース番組の娯楽番組化は、ニュース番組で用いられる言語にも大きな影響を及ぼしている。轟 (2007, 2008) は、近年ニュース番組において顕著に見られる現象として、体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略があることを指摘した。

(11) 体言止め・助詞の省略

- a. お盆を過ぎても続く厳しい残暑。

(「おはよう日本」NHK, 2007年8月23日放送)

- b. 鳩山総理大臣は、オバマ大統領と初めての首脳会談。

- c. 鳩山総理大臣、この後国連で演説を行います。

(「ニュース7」NHK, 2009年9月24日放送)

(12) 動詞的要素の省略

- a. 日本航空の機内食でアメリカ産牛肉です。

(「ニュース7」NHK, 2006年3月10日放送)

- b. このほかにも課題は山積です。

(「ニュース7」NHK, 2009年9月24日放送)

(13) 要点の後置・省略

- a. 700万円払った部下もいました。神奈川県警察本部の警視が関与した疑いが出ている霊

感商法事件で、この警視は、部下の警察官を靈感商法が行われていたサロンに勧誘したり、投資話を持ちかけて金を集めていたことがわかりました。

(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年12月21日放送)

b. 福田総理大臣は。

(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年12月21日放送)

分裂文に関してはどうだろうか。小泉(1998)が述べるように、アメリカCBSのニュース・スタンダードは、話し方による強調はフィクションや娯楽番組で使われる手法であるとしている。分裂文は文のいずれかの要素を強調する目的で使われる構文であるから、その使用はやはり娯楽番組の手法であるということになる。したがって、ニュース番組で用いられる分裂文も、体言止め・助詞の省略などと類似の効果を狙ったものと思われる。次の例には体言止めと分裂文が同時に生じている。

(14) (=4c) 続いて現われたのは、同じく初当選の民主党の玉木雄一郎衆議院議員。

これに対し、3節で述べたように、英語のニュース番組では、インタビューを受けた人の言葉の中くらいにしか分裂文が見られない。これは次のように説明することができる。小泉(1998)が述べるように、アメリカCBSのニュース・スタンダード⁶では、ニュース番組と娯楽番組は明確に区別するべきものとされている。

最も重要なことは、事実を扱うわれわれの報道とフィクションやドラマを扱う娯楽番組との間に、可能な限り鋭い線(中略)を引くことである、という点だ。というのは、ニュースも娯楽番組も、すべて同じブラウン管の、同じチャンネルから、ひとつの時間の流れに沿って切れ目なく流れ出ており、そしてまた放送ジャーナリズムではページを繰ることもできなければ、必要な箇所に下線を引くこともできないからである。それゆえに、われわれがショービジネスをやっているのではないと自負することは、特に重要であり、したがってドラマチックで自由な表現、「事実を反映したフィクション」といった論理、それに話し方による強調の仕方といった、フィクションや娯楽番組では当然のように使われる手法を、絶対に駆使してはならないのである。

(小泉 1998:9)

この基準では、報道と娯楽番組との間には鋭い線が引かれるべきであり、そのために、娯楽番組で使われる手法を報道で使ってはならないとされている。そのような手法の中に、「話し方による強調の仕方」が含まれている。2節で述べたように、分裂文は、一般に強調構文と呼ばれていることから分かるように、文のいずれかの要素を強調する目的で使われるものである。したがって、上のニュース・スタンダードによれば、「娯楽番組で使われる手法」ということになり、ニュース番組では用いられないことになる。分裂文が出現しない英語のニュース番組は、上のような基準に忠実に従っているものと思われる。

日本のニュース番組でも、かつては報道と娯楽番組とのこのような区別が、現在よりも厳密

になされていたと推測される。その根拠の一つとして、轟（2007）が指摘する点が挙げられる。NHKの午前7時から8時までの時間帯は、現在「おはよう日本」という一つの番組が放送されているが、1965年10月23日（土曜日）には二つの番組が放送されていた。当時の新聞のテレビ欄によると、午前7時から7時25分までは「ニュース」であり、午前7時25分から8時までは「スタジオ102」となっている。当日の「スタジオ102」は資料として公開されており内容が確認できるが、扱われている題材や、上に述べたような娯楽番組の手法が見られることから、娯乐的な要素のある番組と推測される。このような番組が「ニュース」と分かれて放送されていたということは、当時のNHKでは、ニュース番組と娯楽番組との間の区別が現在よりも明確であったと推測できる。1965年には「ニュース」（報道）と「スタジオ102」（娯乐的な要素のある番組）の2つの番組が放送されていた時間帯が、現在「おはよう日本」という一つの番組になっているということは、ニュース番組と娯乐的な番組の両者の境界が不明瞭になってきていることを示していると言える。

5. 結論

本論文では、日本語と英語における強調的な表現として分裂文を取り上げ、テレビのニュース番組への分裂文の出現について考察した。

分裂文の出現は、近年、日本語のニュース番組に顕著に見られる現象の一つである。この現象を引き起こしているのは、ニュース番組が娯乐的な要素を盛り込むようになってきていることである。一方、アメリカCBSのニュース・スタンダードにあるような「ニュース番組と娯楽番組との明確な区別」という方針に厳密に従っているニュース番組には、分裂文が見られない。このように、分裂文の出現は、そのニュース番組の編集方針をよく表しているものであるといえる。

ニュース番組の娯楽番組化という傾向は今後も強まり、それとともに日本語のニュース番組で用いられる言語はますます変化していく可能性がある。これは、社会情勢の影響で言語の変化が生じるという例であるといえるが、逆に、言語の変化が社会に影響を及ぼすという側面もある。言語は現代社会を考える上で不可欠な要素なのである。現在は社会情勢の変化が激しく、言語の変化も刻一刻と生じているため、本論文の議論を精緻化するためには、今後も継続的にデータの観察を行っていく必要がある。

なお、過去のニュース番組のデータにアクセスすることは、現在のところ非常に困難になっている。新聞記事などでは容易に過去のデータを入手できるが、テレビのニュース番組の場合、過去に放送された番組で公開されているものはかなり少ない。このことが、ニュース番組の通時的な研究を極めて困難にしている。（中（2008:26）は、テレビは基本的に検証しにくい、または検証を拒むメディアであると述べている。）本論文のようなニュース番組をデータとする言語研究の方法論も今後の重要な課題である。

註

- 1 轟 (2007, 2008) が体言止めあるいは助詞の省略として扱ったのは、発話において間がおかれる直前が名詞で終わっているものである。発話に出てくるある表現が体言止めかあるいは助詞の省略なのかを区別するためには、それぞれを厳密に定義する必要があるが、轟 (2007, 2008) はこれら二つを類似した現象として扱い、体言止めと助詞の省略を明確には区別していない。本論文でも区別しないことにする。
- 2 本論文、および轟 (2007, 2008) が対象としているのは、ニュース番組の中で、アナウンサー、記者などが発している音声言語である。(轟 (2008) にしたがって、アナウンサー、記者など、ニュース番組でニュースを伝えるため音声言語を発している人を総称して「報告者」と呼ぶことにする。) したがって、ニュース番組中の発話でも報告者以外の人の発話は対象としていない。(例えば、インタビュー場面でのインタビューを受ける人の発話や記者会見での発話など。)
- 3 厳密に言えば、(1b) や以下の (ia,b) のように、whatに導かれた強調構文を擬似分裂文 (pseudocleft sentence) と呼ぶ。
 - (i) a. What he bought yesterday was a car.
b. What I want is time.

(原口・中村 1992:91)

分裂文と擬似分裂文の相違は研究上の重要なテーマであるが、本論文では分裂文と擬似分裂文に共通した機能について考察するので、分裂文と擬似分裂文の相違については扱わないことにする。本論文では、分裂文・擬似分裂文を合わせて「分裂文」と呼ぶことにする。
- 4 原口・中村 (1992) によれば、分裂文には、(ii) のような照応焦点型分裂文 (unstressed-anaphoric-focus cleft) というタイプがある。
 - (ii) The leaders of the militant homophile movement in America generally have been young people. It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969.

(ibid.,92)

(ii) では、分裂文で通常焦点要素がくる下線部が照応形 (代名詞) を取り、旧情報を表し、強勢は弱い。このタイプは、先行文脈とのつながりを滑らかにする役割を担っている。本論文では、焦点要素に強勢が来るタイプの分裂文を議論の対象としている。
- 5 註2参照。
- 6 「1976年に公表され、その後改訂や増補が行われてきた。」(小泉 1998:5)

参考文献

- Greenbaum, Sydney, and Randolph Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 原口庄輔, 中村捷編 (1992) 『チョムスキー理論事典』研究社。
- 影山太郎 (1999) 「形態論とレキシコン」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版, 47-96。
- 加来由子 (2007) 「午後のワイドショー消え行く東京」朝日新聞2007年9月19日23面。
- 小泉哲郎 (1998) 『テレビジャーナリズムの作法—米英のニュース基準を読む—』花伝社。
- 村松賢一 (2005) 「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子, 岡本能里子, 佐藤彰編『メディアとことば2』ひつじ書房。
- 中 正樹 (2008) 「内容分析のすすめ—実証することの大切さ」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学—映像時代のメディア・リテラシー』新曜社, 26-37。
- 中島平三編 (2001) 『英語構文事典』大修館。
- 高見健一 (1999) 「統語論 機能主義」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版, 137-183。
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版。
- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで 사용되는言語の変化—英語学習者に対する影響—」『北陸大学紀要』第31号, 125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第32号, 121-133。